

早稲田大学 人間科学部 古典 講評

〔総合分析〕

<p>出題形式 出典解題</p>	<p>マーク式</p> <p>飛鳥井雅有^{あすかいまさあり}著『はるのみやまじ(春の深山路)』 日記</p> <p>弘安三年(1280)正月一日から十一月末までの、作者四十一歳の一年間を記した仮名日記。前半の三分の二は、内裏・東宮・仙洞に仕える都での日々の生活、殊にその家柄である蹴鞠をもって仕えた記事を多く記し、後半の三分の一は、十一月十四日に都を出発、同月二十六日に鎌倉に着くまでの東下りの旅日記を記す。本文は、前半の一部。</p> <p>飛鳥井雅有(あすかい・まさあり)</p> <p>鎌倉時代の歌人。仁治二年(1241)生まれ、正安三年(1301)正月十一日没、六十一歳。</p>
----------------------	---

〔大問別講評〕

番号	出題内容	コメント
()	問十三 傍線部訳	基本語彙、Aは「ゆかし」・Dは「そら」・H・助動詞「まし」を精確に解釈すれば正解は得られる。
	問十四 文法	極めて基礎的な設問。01年度のような整序問題(「たまふ・す・まし」を接合させる設問)に比すると品詞を問うだけの、むしろ物足りない設問と言えよう。
	問十五 人物特定	人物を特定させる典型的な設問。文脈は捉えやすいので、正解も得やすい。
	問十六 空欄補入	二か所とも名詞を入れるもので、空欄の前後の内容も捉えやすいので、選ぶのも容易であろう。
	問十七 和歌の修辞	和歌の中から修辞技巧を見出だす設問ではないが、「花」と「種」が縁語であることは明らか。易。

	<p>問十八 内容一致</p>	<p>本文の内容に合致しない選択肢や本文に記述のない選択肢を消去すれば、おのずと正解は得られる。本文の内容、選択肢共に把握しやすいものである。</p>
	<p>問十九 漢文</p>	<p>古文とは全く独立した設問。昨年に引き続き、返点を付す内容。動詞と目的語・補語の関係を捕らえれば、選択に迷う事はなかるう。</p> <p>「花(ハナ)ノ下(モト)ニ歸(カヘ)ラムコトヲ忘(ワス)ルルハ、美景(ビケイ)ニ因(ヨリ)テナリ 樽(ソン)ノ前(マヘ)ニ酔(ヱ)ヒヲ勸(スス)ムルハ、是(コレ)春(ハル)ノ風(カゼ)」と訓む。</p>
	<p>問二十 文学史</p>	<p>基本問題。易。</p>

〔総合コメント〕

難易度は標準～やや易。

人間科学部の平年並みの分量の本文、出題形式、及び難易度であったと言えよう。01年度の『続古事談』がおよそ750字、02年度の『十訓抄』がおよそ860字であって、本年の『春の深山路』はおよそ950字で些か長い本文であったとはいえ、それ程の増加とはいえまい。また出題形式は、昨年の『十訓抄』の形式をほぼ踏襲する。